

---

# ルールなんてクソくらえ

カルマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ルールなんてクソくらえ

### 【Nコード】

N5100BA

### 【作者名】

カルマ

### 【あらすじ】

新たなエネルギー、ヴィスを手に入れた人類。それによって生まれる新たな人種シンと新たな生物ヴィータ。ヴィータに対抗するために生み出されたヴィスタ。人類とヴィータの戦いの物語…

## 序 歴史(前書き)

はじめましてカルマです。よければ楽しんでみてくださいください。

## 序 歴史

西暦2222年、人類は新たなエネルギー「ヴィス」を発見する。このヴィスの発見により、人類は新たな歴史を刻む。ヴィスは、宝石や鉱石から発見された新たなエネルギーで、とても万能なものだった。

エネルギーは西暦1970年代に入り、石油危機や化石燃料の枯渇や燃焼ガスによるさまざまな環境問題が起こり、風力、水力、太陽光エネルギーが注目されるようになった。しかし、それらのエネルギーは高度に発展した世界の燃料として活用するには微々たるもので、結局石油や化石燃料を使用し続け、地球の環境問題は深刻なものとなっていた。しかし、ヴィスの発見に世界は狂喜する。ヴィスは少しの量で多くの効果が得られるだけでなく、宝石や鉱石が生み出す半永久的なエネルギーだったのだ。しかもヴィスを使用しても環境には全く影響はなく、世界は瞬く間にヴィスを受け入れていった。

時は流れ、環境には全く影響を与えなかったヴィスだが、そのエネルギーを使い続けることで人の体には変化が起こる。西暦2300年、体内でヴィスを生成する人種の出現である。またその新たな人種は体内で生成したヴィスを使い、それまでは空想の出来事であった魔法のような力を使った。ある者は何もないところから炎をだし、ある者は空を駆け、ある者は傷ついた者を一瞬で癒した。しかし、新たな存在とその力は世界に新しい差別を生んだ。当時の世界の人口は100億人を突破していたのだが、その割合からしてもヴィスを生成する人は約1万人に1人しか誕生せず、異端の存在「シン」と呼ばれ迫害を受けた。この迫害は世界中で起こり、ついには世界規模での問題となる。西暦2352年迫害革命勃発である。

この迫害革命は50年にも及んだが、次第に沈静化する。迫害革命の中でもヴィスというエネルギーの使用は続けられていたため、シンの誕生の割合が増したためだ。当初1万人に1人の割合だったものが100人に1人は誕生するようになりやつと新たな人として認められたのだ。元は罪という言葉から生まれたシンという呼び名も新しい人種シンと呼ばれた。

最初は人にその変化を与えたヴィスだが、時を経て人以外の生物や植物に変化を与え出した。ヴィスは空想の力を人に与えただけでなく、空想の生物も世に創り出したのだ。人並みの知識を得て二足歩行する獣や、絶滅したはずの人の何倍もの大きさを誇る恐竜「ドラゴン」の出現に人々は恐怖した。しかも新たなその生物はヴィスの力なのかそれまでの人の持つ武器が通用しなかった。銃を撃つても跳ね返す強靱な体。ミサイルをも超える威力を持った咆哮。人類は新たなヴィスの力を持つ生物をヴィータと呼び恐怖した。そんな中、ヴィータに対抗できる人が世界で立ち上がる。ヴィータと同じようにヴィスの恩恵を受けた新たな人類シンである。また、シンではない人々もただ逃げるだけではなかった。ヴィスがヴィータには有効であることはシンによって証明できていたので、ヴィスを利用した兵器を發明していったのだ。元々の生活の要のエネルギーであった石油や化石燃料からヴィスを生活の要へと変化させた人類にとって、ヴィスを兵器利用することはそれほど時間の必要なものではなかったのだ。これにより人類はヴィスを利用し駆動する鎧を作り上げる。ヴィスを利用し、多くのエネルギーを消費するためシンなかでも選ばし者しかそれを操ることは出来なかったが、その鎧を纏ったシンは強大な力を誇った。この鎧をヴィスを駆使し動くことからヴィスタと呼びヴィータに対抗する。その戦いは時を経て苛烈し激化する。

そして西暦3012年、世界は新たな歴史を刻む……

## 序 歴史（後書き）

誤字脱字などがあれば教えてください。すぐに確認して修正したい  
と思います。

## プロローグ

「君には本日付で我が校を退校してもらおう。つまりは 退学だ」

目の前にいる偉そうな老人が、やはり偉そうにこちらに何かを言っている。話している内容には予想がついていた面白味の欠片も存在しない内容だったので、まったく興味はない。むしろそんなことを伝えるために呼び出されたということに怒りを感じる。

「…そうですか。わかりました」

そう告げると自分の体を出口へと向ける。これ以上ここに居る必要性は感じない。

「待ちなさい」

後ろから呼びかけられる。無駄に偉そうな老人の、偉そうな声は聞くだけで神経を逆なでする。

「何か？」

実際振り返るのも面倒に感じたのでそのまま背を向けたまま話す。つい先ほど退学になったのでこれでも問題ないだろう。無視しなかっただけでも感謝してもらいたいぐらいだ。

「……君はなぜあんなことをしたんだ？君に罪悪感はないのか？」

「ないな」

「何だと？」

聞かれたことに答えてやったのにさらに質問してきた。頭の回転の弱った老人との会話は疲れてしまう。

「ないと言ったんだ。なぜあんなことをしたかと聞かれればなんとなくだし、罪悪感なんて聞かれてもそんなものは微塵も感じていない」

「……もういい。行きなさい」

自分から呼び止めたくせに今度は行けと命令する老人にやはり怒りを感じるが、素直に体を出口へと動かす。これ以上こんな場所に居るよりも無視したほうがよっぽど建設的だと思う。

この日俺は、自由になった。

## 第一話

「いらっしゃいませ」

俺はそう声をかけながらカウンター越しに席に着いた女性二人におしぼりを渡す。

「はじめまして。司です。今日は何を飲みますか？」

目の前に座る女性二人を見たことがなかったので簡単な挨拶をして、オーダーを聞く。新規の客に対するマニュアルだし、もう何度も繰り返してきたことなので意識しなくても言葉が口から出る。

「はじめまして、先輩。私はパインジュースをください」

「あ、私も同じものをお願いします、先輩」

「は？……わかりました。パインジュース二杯ですね」

なれない言葉に一瞬素の自分が口から出てくる。目の前の二人が何を言っているのか頭が理解を許さない。だから何も聞かなかったことにしてオーダーのものを作りにかかるところにした。普段頼まれるカクテルなどと違ってソフトドリンクはすぐに準備ができるから楽でいい。

「どうぞ」

「わあ、ありがとうございます。先輩って手際いいんですね」

「そんなことないですよ。それではゆっくり楽しんでください」

その言葉を出してカウンターから外に出ようとした。意味のわからないことは無視。めんどくさそうだから他の奴とカウンターを今日は変わってもらおう。

「ちょっと待ってください」

裏に下がろうとしたらそう聞こえてきた。ちっ、面倒そうだな。

「どうしました？」

どんなに面倒に感じても無視する訳にはいかない。一応飲み物を頼んだ時点でお客様だからな。無視したのが店長にバレた瞬間に、鉄拳制裁されてしまう。

「実は私たちは、藤島先輩に会いに来たんです」

「……さっきも思ったんですが、その先輩って何ですか？」

「先輩は先輩ですよ」

ニコニコしながら女性の片割れが話す。

「すいません。この言葉が足らなくて……私はラクリマ学園の二年の橘茜たちばなあかねと言います。この子は同じクラスの……」

「鳳明日香おおとりあすかです」

ニコニコと自己紹介する二人とは反比例するように、俺の気持ち

は沈んでいく。

「ラクリマ学園の生徒ですか……」

「はい。私達が先輩って呼ぶのも理解してもらえました？」

橘と名乗った少女が話しかけてくる。しかし、今となっては不快感しかない。

「分からないですね。……多分、人違いじゃないですか」

「そんなことないですよ。だって先輩は藤島司ふじしまつかさですよ？さっき『司です』って名乗ってたし」

もう一人の少女……鳳は話しかけてくる。その言葉に、俺の顔は苦虫を噛み潰したような顔になっているだろう。

「……君たちがラクリマ学園の生徒だというのはわかりました。ただ、先輩と呼ばれるのがわからないんですよ」

過去はどうあれ、俺は今現在学校なんて通っていないし、卒業生でもない。今更少女二人に先輩などと呼ばれる理由は本気で理解出来ない。したくもないが……

「先輩は先輩ですよ。元ラクリマ学園生徒会書記の藤島先輩」

鳳の言葉に俺のイライラはピークに達する。忘れていた……いや、忘れたい過去を楽しそうに語られると目の前の小娘を縊り殺したくなる。

「そう、俺は学園の元生徒だ。別に卒業したわけでもない。だから今学園に通っている君たちとは何の関係もない。理解したか？……さっさと帰れ」

できるだけ高圧的に言い放つ。この目の前の二人からはイライラとともに嫌な予感しかしてこない。関わるなんてもつてのほかだ。

「そうはいきません。私たちは先輩にお願いがあつてここまで「俺にはない」「

鳳の言葉に被せ気味で発言し、最後まで言葉を綴らせない。このまま押し切る。

「いいか？俺にとつてはお前たちはストレスでしかない。そんなモシに関わる気はないし、頼みを聞いてやる義理もない。今すぐ帰れ」

「お願いですから話だけでも「聞く気はない」「

「なんでよ！聞くぐらいいいじゃん！」

「うるさい。俺に聞くつもりはない！さっさと帰れ」

何度も言葉を遮られ、鳳は不機嫌な顔を隠さない。だが、そんな顔すら俺には不快の種だ。気に入らないのなら俺の言つとおりさっさと帰ってほしい。

「明日香ちゃん、ちょっと静かにして。……藤島先輩、一つだけ聞いてください」

「……………」

今まで黙っていた橘が鳳の言葉を止め、冷静に俺を見ながら聞いてくる。鳳のように自分の感情に素直に話してくるなら俺も言いたいことを言えたが、いきなりのテンションの変化に沈黙してしまう。しかし、この場での沈黙は肯定と変わらない。俺の無言に橘は言葉を続ける。

「私たちは理事長からの紹介でここに来ました。あなたなら私たちの問題の解決に一番の近道だといわれています。私にはその意味は分かりません。だけど、私たちには理事長の言葉を信じてあなたを頼る以外にないんです」

しっかりと俺の目を見ながら話す橘を俺は止めることができなかつた。無意識にその言葉の意味を考えさせられてしまう。

(あの理事長が俺を紹介した？こいつらの問題ってなんだ？俺に何を求めている？)

「今日すべてをお話しすることはできません。今は先輩も仕事中ですし、かなり人目も惹いてしまいました。出来れば時間と場所を変えてもう一度お話しをしたいのですが？」

その言葉を繋ぎ、俺からの返答を待つ。その間も俺の頭の中に先ほど浮かんだ疑問が俺の思考を邪魔する。

(くそ！やっぱり話なんて聞かずに追い出せばよかった。こいつの話が気になってしょうがねえ)

俺の中の疑問を消化できない不快さと、もう一度あの学園と関わる不快さを天秤にかけて橘に返事をする。

「話だけだ。それを聞いたとして俺がお前らのために動くとは限らない」

「構いません。話を聞いてもらえるだけでも私たちには大きな一歩です。ありがとうございます」

橘は本当に嬉しそうに魅力的な笑顔を俺に向けてくる。

「それでは先輩「一つ条件がある」……なんですか？」

先ほどから橘のペースにはまっってしまったのでここで言葉を遮り、少しだけ仕返しをする。

「俺を先輩と呼ぶんじゃない」

「わかりました。それでは藤島さん……今週末にラクリマ学園の理事長室でお待ちしています。そこでなら理事長も交えて、藤島さんの疑問をすべて解決できると思います」

学園に来いと言われ顔をしかめた俺に、すぐにその理由を言われ俺の言葉は封殺される。

「分かった」

そこにいるのは勝者と敗者だ。敗者はただ勝者の言葉を聞いていればいい。

「それではお待ちしてますね。行くわよ、明日香ちゃん」

「うん」

傍らにいた置物のように沈黙した鳳を連れて魔女は出ていく。終わってみればあの年下の女の子にいいように扱われた気がする。

「なあ、司」

「ん？」

一人で先ほどの会話の反省会を脳内で繰り返していると、同じようにこのBARで働いている友人の鈴木慶すずき けいが話しかけてきた。

「あの子たち知り合いか？」

「知り合いってわけでもないが、俺の客だったみたいだな」

「そっか……」

そういうと慶は難しい顔をしている。普段あまり表情を変えないこいつにしては珍しい。

「どうした？」

そう聞く俺に信じられない言葉が聞こえてくる。

「あの子たち、会計してないけど？」

.....  
食い逃げ？

## 第二話

「久しぶりだな……」

校門の前に立ち、かつて自分が通った学び舎を眺めて独りつぶやく。

「あのクソガキ共。絶対回収してやる」

昨日のことを思い出すと怒りがこみ上げてくる。結局あの小娘二人の飲んだ分は俺のカケという扱いにされ、きちんと飲んだ分を回収して店に入れなければ給料から徴収されてします。たかがジューズ代だが、よく知りもしない元後輩の分を払ってやる義理も余裕もない。

「理事長室だったな」

回収の思いを新たに決意し、その足を元学び舎にある理事長室へと向ける。しかし、校門から学舎へと歩けばいろいろな思い出が頭をよぎる。この学園を辞めたことになんの後悔もないが、過去を思い出せば少しは感慨深くもなるようだ。

「ん？おい、お前藤島か！？」

しかし広い学園だな。この学園の学ぶことを考えりゃ仕方ないのかもしれないが、こんなことに金使うぐらいなら俺に少しばかり分けられてもいいんじゃないだろうか。

「てめえ無視すんな！」

「うるせえー！」

「うっ……」

突然肩を掴まれたので思い切り鳩尾に膝を入れて黙らせてやる。

「まったく最近じゃ学園内で通り魔が現れるのかねえ。嫌な時代だ」

「待ちなさい」

障害物を排除してそのまま歩き出したら、今度は別の女性の声で呼び止められた。

「何？」

「あなた、見たところ学園の生徒じゃないみたいだけど？」

振り向いてみればそこにはうずくまる男の後ろに怒った顔の女性が立っており、こちらを睨んでくる。

「そつだよ。……それじゃ」

トラブルの匂いがするし、女性の疑問に答え、そのまま去ろうとする。

「熱っ！」

すると俺の顔数ミリ横を火の玉が飛んでいく。

「この学園は関係者以外立入禁止よ。すぐに出て行きなさい」

「だからっていきなり何しやがるてめえ！」

拳を握り締め、完全に臨戦態勢になって女を睨みつける。

「いきなり我が校の生徒に乱暴をする人には私も遠慮はしません」

女も足を少し開き、すぐに行動を起こせるように構えていた。

「うるせえ！じゃあお前がカケ払ってくれんのか？ああん！？」

気分はもうヤの付く人の取り立て屋だ。こつちだつて無銭飲食する生徒や、いきなり襲いかかってくるような生徒がいる学園で遠慮する気はない。俺の邪魔をする奴は全部なぎ倒す。

「カケ？」

「おう。お前の言う我が校の生徒さんが無銭飲食した分きつちり払えや」

実際それさえなければこんなところには来ていなかった。昨日の時点では話の内容も気になってはいたが、1日経てばそんなもの気にはならない。ようは関わらなきゃいいだけなのだから、無銭飲食した二人にはイライラが積もるばかりだ。

「我が校はエリートが集まりよ。そんな低俗な問題を起こすわけないでしょう。そんな嘘についてまで学園に入ってくるなんて……あなたを拘束します」

言つが如く女は勢い良く人とは思えないスピードで突進してくる。

「危なっ」

それを反射的に躲し、そのまま蹴りを叩き込もうとしたがあと少しというところで躲されてしまった。

「今の動き、あなたまさか……？」

「気をつけてください、会長。あいつもシンです」

さっきまで蹲っていた男が立ち上がり、目の前の女に声をかける。ああ、プライバシーってのはこうやって侵害されていくのだろう。今すぐ蹴り倒してやりたいが、敵が二人並んでいる為にそうもいかない。

「シン……どういうことなの？」

「あいつは去年この学園を退学になった元この学園の生徒です」

「人のことをベラベラとうるせえぞ！ さっきも俺の名前呼んでたな。誰だお前？」

「なっ……」

見覚えのない奴に自分のことばかり話されるのは癪にさわるので問い詰めたら、男は驚愕した顔をした。なぜかそのマヌケな顔に少し見覚えもある気がする。

「お前たち、そこで何を騒いでいる……」

男のマヌケな顔を見ていると新たに壮年の男性が現れる。口調と見た目からしてこの教師だろう。通っていた時も見たことないから確信は持てないが……

「久遠か、お前までいて何の騒ぎだ」

「すみません、佐々木先生。我が校の生徒に暴行を働く怪しい者がいたので、取り押さえようとしていました」

そう言いながらこちらを睨む久遠と呼ばれた女と佐々木と呼ばれた男性教師。その後ろではさっきまでマヌケな顔をしていた男もこつちを睨んでいる。

「俺はいきなり襲われたから、正当防衛でその大男を黙らせただけだ」

さすがに3対1では分が悪いので、両手を挙げ降参のポーズで言葉を紡ぐ。

「確かにこの彼の声の掛け方も乱暴だったけど、あなたの返事はそれ以上だったわよ」

「親から身の危険を感じたらすぐに行動しろって言われててね」

「手を出したのもあなたからよ。正当防衛は通用しないわ」

「先手必勝って言うだろ？」

「無茶苦茶言わないで」

「こちらが口撃に切り替えたのを感じ、久遠がすぐに噛み付いてくる。」

「久遠、落ち着きなさい。とにかく君は誰だ？なぜこの学園内にいる？」

佐々木は教師らしく久遠を落ち着けながら、こちらに不審なモノを見る目で声をかけてくる。さすがに今のやり取りで俺を信用する気は全くなくなったのだろう。まあ元々学園の生徒と元学園の生徒の立場が分かれば信用されないと思っていたからこそその言葉だが…さすがに本心で今みたいなことは口にはしない。

「俺は藤島司だ。今日はこの学園の生徒が無銭飲食してくれたからその回収に来た。ついでに理事長に呼ばれている」

「無銭飲食に理事長？」

佐々木は困惑した顔をしている。わからなくはないが、俺は事実を口にしただけだ。

「嘘ついてんじゃねえぞ、藤島。この学園をクビになったお前なんか理事長が呼ぶわけないだろ」

今まで空気のような存在感だった男がいきなりがなってきた。

「だったら確認してみるよ。調子づいて口開くんじゃねえぞ空気男」

「なんだと！？この野郎」

「黙れ大宮。話ができん」

大宮と呼ばれた空気男は教師にまで黙れと言われ大きな体を小さくして黙り込む。目尻に見える水分は見なかったことにしよう。気持ちが悪い。

「確かに君が理事長に呼ばれたかどうかは確認すればすぐにわかる、ついてきなさい。お前たちもついてきなさい」

そう言っただけ俺達をを学舎の方まで誘導しようとする。その背について俺が歩き出せば、2人も俺を睨みながら歩き出す。

「ああ、めんどくさ」

さすがに気持ちが悪くなって出てくる。それもこれもあのクソガキ共のせいだ。見つけたら慰謝料と迷惑料も請求してやる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5100ba/>

---

ルールなんてクソくらえ

2012年1月14日10時46分発行